

| | |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 興味が引き起こされる心理的メカニズムに関する研究： 「興味引き金仮説」に基づくモデルの提案 |
| Sub Title | Research on the psychological mechanism in the occurrence of interests |
| Author | 伊藤, 貴昭(Ito, Takaaki) 小口, 鈴実(Oguchi, Suzumi) 神原, 知愛(Kanbara, Chiai) 平沼, 純(Hiranuma, Jun) 鹿毛, 雅治(Kage, Masaharu) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2006 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.63 (2006.) ,p.63- 72 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | The purpose of present study was to clarify the psychological mechanism that aroused interests and to examine the "Triggered Interests Hypothesis" that a concrete, momentary, and specific event aroused interests. Participants (545 university students) completed the personal documents about the development of their own intrinsic motivations. The content of their interests, the experience of triggered interests or non-triggered interests, the age and the environment of the experiences were categorized. The results were as follows: (1) 27.4% of all data were classified as triggered interests, (2) there were more trigger experiences in the high school age than in other ages, (3) the contents about music and reading were influenced by the age. These findings suggest that interests can be illustrated by the trigger interests hypothesis to some extent. |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000063-0063 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

興味を引き起こされる心理的メカニズムに関する研究

—「興味引き金仮説」に基づくモデルの提案—

Research on the Psychological Mechanism in the Occurrence of Interests

伊藤 貴昭*・小口 鈴実*・神原 知愛*

Takaaki Ito,

Suzumi Koguchi,

Chiai Kambara,

平 沼 純*・鹿毛 雅治**

Jun Hiranuma,

Masaharu Kage

The purpose of present study was to clarify the psychological mechanism that aroused interests and to examine the “Triggered Interests Hypothesis” that a concrete, momentary, and specific event aroused interests. Participants (545 university students) completed the personal documents about the development of their own intrinsic motivations. The content of their interests, the experience of triggered interests or non-triggered interests, the age and the environment of the experiences were categorized. The results were as follows: (1) 27.4% of all data were classified as triggered interests, (2) there were more trigger experiences in the high school age than in other ages, (3) the contents about music and reading were influenced by the age. These findings suggest that interests can be illustrated by the triggered interests hypothesis to some extent.

1. 問題と目的

学習への動機づけ研究における近年の動向として、学習への動機を一元的なものとしてとらえるのではなく、発達の観点から、構造的、統合的なものとして把握しようとする理論が提唱されるようになってきた(鹿毛, 1995; 速水, 1998 など)。その動向を踏まえて、学習への動機づけの構造とその発達について実証的に検討された結果、学習意欲はいくつかの質の異なる要素によって形成される構造をなしていることや、意欲の高低によってその構造の統合のあり方が異なってくることなどが明らかにされた。その中でも特に、意欲の高い者であるほど、内容必然的学習意欲(～がしたいからする)と自己必然的学習意欲(肯定的な自己概念の獲得のためにする)とが統合した学習意欲の構造を持つ割合が高いことなどが示された(鹿毛, 1998, 1999)。また、内発的動機づけの発達について記されたパーソナルドキュメントを分析することにより、学習への動機づけの発達過程も具体化されてきている(鹿毛, 2000)。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻

** 慶應義塾大学教職課程センター

それでは、内発的動機づけが発達する最も初期段階はどのようになっているのであろうか。Deci & Ryan (1991) は、内発的動機づけは興味から生じることを明らかにしている。興味は、知識の増加やポジティブな情動など、個人の特性に関連した興味と、学習状況や学習内容など、状況に関連した興味の 2 つに大別される。これらの興味の概念に共通している点は、どのような興味も個人の特性と状況との相互作用によって生起するという点である (Renninger, Hidi, & Krapp, 1992)。それはたとえば、人と物との関連 (Fink, 1991 など) や、人と刺激との相互作用 (Hidi, 1990 など)、個人と社会的環境における物、課題などとの相互依存 (Renninger, 1984; Renninger, Ewen, & Lasher, 2002) などとして示されてきた。だが、その個人の特性と状況との相互作用自体がどのようなものなのかなど、興味が引き起こされる心理的メカニズムについては必ずしも明らかになっていない。

では、何がきっかけとなって、つまり、どのような個人の特性 (年齢や傾向性など) と環境とが相互作用することによって、内発的に動機づけられて行う何かに対して初めて興味がわく (初発興味) ののだろうか。また、興味は何か特定の出来事が引き金となって一瞬にして生起するのか、それとも、時間とともに徐々に生起してくるのであろうか。さらに、初発興味の内容によって、それが生起しやすい個人の特性、環境は異なるのであろうか。本研究では内発的動機づけについて記されたパーソナルドキュメントのデータを用いて、初発興味の内容を分類し、興味が生起したきっかけとなった環境、年齢との関連について検討することで、内発的動機づけの発達における最も初期段階である初発興味のメカニズムをモデル化することを目的とする。特に、モデル化を目指すにあたり、興味が生起したきっかけが衝撃的である、つまり、個別具体的で一時的な特定の出来事 (「あのとき、あの瞬間」) が引き金 (契機) となって初発の興味が生じるというモデル (興味引き金仮説) を設定し、このモデルに基づいて分類する。そして、分類された初発興味の内容、環境、年齢、そしてこれらの相互関係について検討することで興味の生起する心理的メカニズムを明らかにすることが目的である。あらかじめ仮説を設定するのは、その仮説に基づくことで、分類の視点が明確になり、より詳細に心理的メカニズムを検討することができるからである。

2. 方 法

2.1 被調査者

都内 2 大学 (共学・女子大学各 1) に在籍し、「教育心理学」を履修中の大学生・大学院生 545 名 (男性 194 名, 女性 339 名, 不明 12 名) であった。

2.2 調査方法

自分自身の内発的動機づけの発達について分析したパーソナルドキュメント (2,000 字以上) を収集した。依頼する際、被調査者には以下の 5 つの内容を文章の中で必ず記述するように求めた。

- ①内発的動機づけの具体的内容: 何に対して内発的に動機づけられている, または, いたのか。
- ②理由ときっかけ: なぜ, そのことについて内発的に動機づけられたのか。また, その契機は何か。
- ③発達の過程と影響を及ぼした要因
- ④自分にとっての意味・価値
- ⑤将来の展望

被調査者は「内発的動機づけ」を扱った講義をすでに受講していたが、依頼する際に内発的動機づけ

の概念と参考文献について記したプリントを配布することによって、要求する課題に対する無理解が生じないように配慮した。特に①については、もっとも内発的に動機づけられている内容を1つ選んで回答するよう求めた。なお、このパーソナルドキュメントは「教育心理学」の成績評価のための情報としても用いられた。また、被調査者には書面で、これが研究目的で行われること、データとして用いることを拒否することができること、拒否することによって不利益が生じないことを知らせた。

2.3 分析方法

本研究では、パーソナルドキュメントの内容のうち、①内発的動機づけ（興味）の具体的内容、②理由ときっかけに焦点を当てて分析した。

①については、スポーツ、学問、音楽、語学、仕事、国際・文化、芸能（映画、演劇など）、読書、文芸、美術、その他の11カテゴリーに分類した。スポーツに関しては、自ら運動すること、観戦すること、またそのスポーツに関する情報を収集することも含まれる。学問に関しては、語学以外で具体的な教科や内容が記載されているものに限り、勉強一般と判断されるものはデータから除外した。

②については、(a)引き金体験によるのか非引き金体験によるのか、(b)その体験をした時期（就学前、小学校、中学校、高等学校、高等学校卒業後）、(c)その体験をした環境や場所（教育機関、家庭、自己内意識、その他）の三次元で分類を行った。教育機関には、学校、塾、予備校、習い事などの教育的営為が行われる場所を含む。自己内意識には、初発興味の契機となる出来事が、自己の外側で起きたことではなく、自己内部の意識の出来事として記述されているものを分類した。その他には、上記3つ以外の場所で起きた出来事を初発興味の契機として記述されているものを分類した¹。また、心理的メカニズムを検討するため、事例を抽出し質的分析を行った。

②-(a)の引き金体験/非引き金体験の分類は、内発的動機づけの初発興味の契機が、個別具体的で一時的な特定の出来事として記述されているか否かで分類した。個別具体的で一時的な特定の出来事の記述とは、「あのときのあの出来事が、私の〇〇の興味を引き起こした」のような記述である。

なお、分類に当たっては、筆者5人が分担して行ったあと、全員で全データを検討し、同一の基準で行われるように配慮した。

3. 結 果

3.1 初発興味の種類と引き金体験との関係

分析においては、545の全データのうち、興味の内容として勉強一般と判断される24を除外した521のデータを対象とした。その結果、引き金体験に基づいて興味が生じたと回想しているデータは、全体の27.4%（引き金あり143人、引き金なし378人）であった。また、初発興味の種類は、スポーツ（22%）、学問（21%）、音楽（15%）、語学（12%）、その他（11%）、仕事（5%）、国際文化（4%）、芸能（3%）、読書（3%）、文芸（2%）、美術（2%）の順に多いことが分かった。

さらに、得られたデータを、引き金体験の有無、興味の種類、年齢で分類した結果を表1に示す。ただし、年齢の区分が不明な場合は表1から除いた。

¹ ただし、環境や場所については、特に顕著な違いが見られなかったため、本稿では、結果、考察に記載しないものとする。

表 1 引き金体験, 初発興味の種類, 年齢によるデータの分類 (度数)

| | | | 年 齢 | | | | | 合計 |
|-------|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | | 就学前 | 小学生 | 中学生 | 高校生 | 高卒後 | |
| 引き金あり | 種類 | 音楽 | 7 | 8 | 5 | 6 | 4 | 30 |
| | | 学問 | 3 | 4 | 4 | 11 | 3 | 25 |
| | | 芸能 | 3 | 1 | 0 | 3 | 0 | 7 |
| | | 国際文化 | 0 | 1 | 0 | 3 | 4 | 8 |
| | | 語学 | 0 | 2 | 2 | 6 | 8 | 18 |
| | | 仕事 | 0 | 2 | 0 | 2 | 1 | 5 |
| | | スポーツ | 4 | 2 | 3 | 1 | 5 | 15 |
| | | その他 | 2 | 3 | 1 | 3 | 2 | 11 |
| | | 読書 | 0 | 1 | 2 | 2 | 0 | 5 |
| | | 美術 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| | | 文芸 | 0 | 2 | 0 | 2 | 1 | 5 |
| | | 合計 | | 19 | 27 | 17 | 39 | 29 |
| 引き金なし | 種類 | 音楽 | 24 | 9 | 8 | 2 | 2 | 45 |
| | | 学問 | 5 | 19 | 8 | 25 | 14 | 71 |
| | | 芸能 | 3 | 3 | 0 | 1 | 2 | 9 |
| | | 国際文化 | 3 | 2 | 0 | 4 | 4 | 13 |
| | | 語学 | 3 | 8 | 13 | 8 | 7 | 39 |
| | | 仕事 | 0 | 2 | 3 | 3 | 12 | 20 |
| | | スポーツ | 11 | 24 | 20 | 7 | 23 | 85 |
| | | その他 | 6 | 6 | 1 | 3 | 18 | 34 |
| | | 読書 | 7 | 1 | 0 | 2 | 2 | 12 |
| | | 美術 | 3 | 3 | 1 | 0 | 0 | 7 |
| | 文芸 | 0 | 2 | 0 | 1 | 3 | 6 | |
| | 合計 | | 65 | 79 | 54 | 56 | 87 | 341 |

3.2 年齢と引き金体験との関係

年齢によって引き金体験の有無に差が生じるかを見るために χ^2 検定を行ったところ、有意であった ($\chi^2(3)=10.04, p<.05$)。そこで、年齢別に引き金体験の有無の頻度を表すと図 1 のようになった。図 1 を見ると高校生において、引き金体験による初発興味が特に多いことが分かる。

3.3 初発興味の種類, 年齢と, 引き金体験との関係

初発興味の種類が同じであっても、その年齢が異なることで、生起のメカニズムが異なる可能性がある

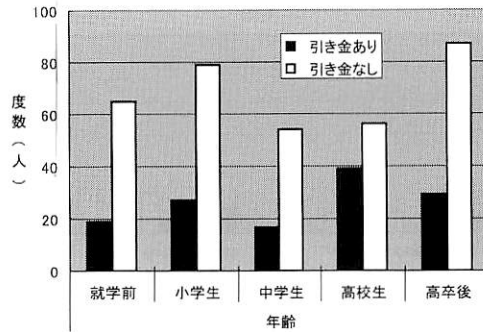


図1 年齢ごとの引き金体験の有無

る。初発興味の種類ごとに、引き金体験の有無と年齢との関連を調べるため χ^2 検定を行った結果、音楽 ($\chi^2(4)=10.15, p<.05$)、読書 ($\chi^2(4)=9.78, p<.05$) で有意であった。これにより、初発興味の種類の中でも、音楽と読書は、引き金体験の有無が年齢によって異なるといえる。そこで、年齢ごとに引き金体験の有無と興味の種類との関係を表したものが図2である。図2から引き金体験の有無の頻度を元に、各種類を相対的に比較した。その結果、音楽の場合、就学前においては引き金体験の頻度が相対的に低いが、それ以降の年齢では高くなっていくことが分かる。逆に有意な結果ではなかったが、興味の種類として最も多く回答されたスポーツ、学問の2つは注目に値する。まず、スポーツについては、就学前において引き金体験の頻度が相対的に高いが、それ以降の年齢になると低くなっていくことが分かる。また、学問については、小学生において、引き金体験の頻度が相対的に低いが、中学生になると頻度が高くなるということが分かる。

4. 考 察

4.1 興味引き金仮説の妥当性

本研究では、特定の出来事が引き金となって興味が生起するのか（興味引き金仮説）、あるいはそうではないのかに基づいて分類を行った。結果として、全体の27.4%は引き金体験によって興味が生起したことが示された。仮説として設定した「興味引き金仮説」が、一部については当てはまることが示されたといえよう。一方、残りの7割強については、興味が時間の経過とともに徐々に生起した例であり、「興味引き金仮説」では説明できない。この点については後述するが、以下ではまず「興味引き金仮説」に合致した事例の特徴について考察する。

4.2 興味と年齢との関係

パーソナルドキュメントで報告された興味を発生年齢別に分析した結果、特に高校において引き金体験の頻度が高いことが示された（図1）。これは、高校入学後に行動範囲が広がるためであると思われる。行動範囲が広がった結果、中学までには経験できなかった新規の体験をする機会が多くなり、引き金体験として興味の生起につながったのではないかと考えられる。一方、高校卒業後も行動範囲が広がり、引き金体験の頻度が高まることも考えられるが、本研究ではそのような結果が示されなかった。その理由として被験者の大部分が大学2年生か3年生であることが挙げられる。つまり、大学入学後に

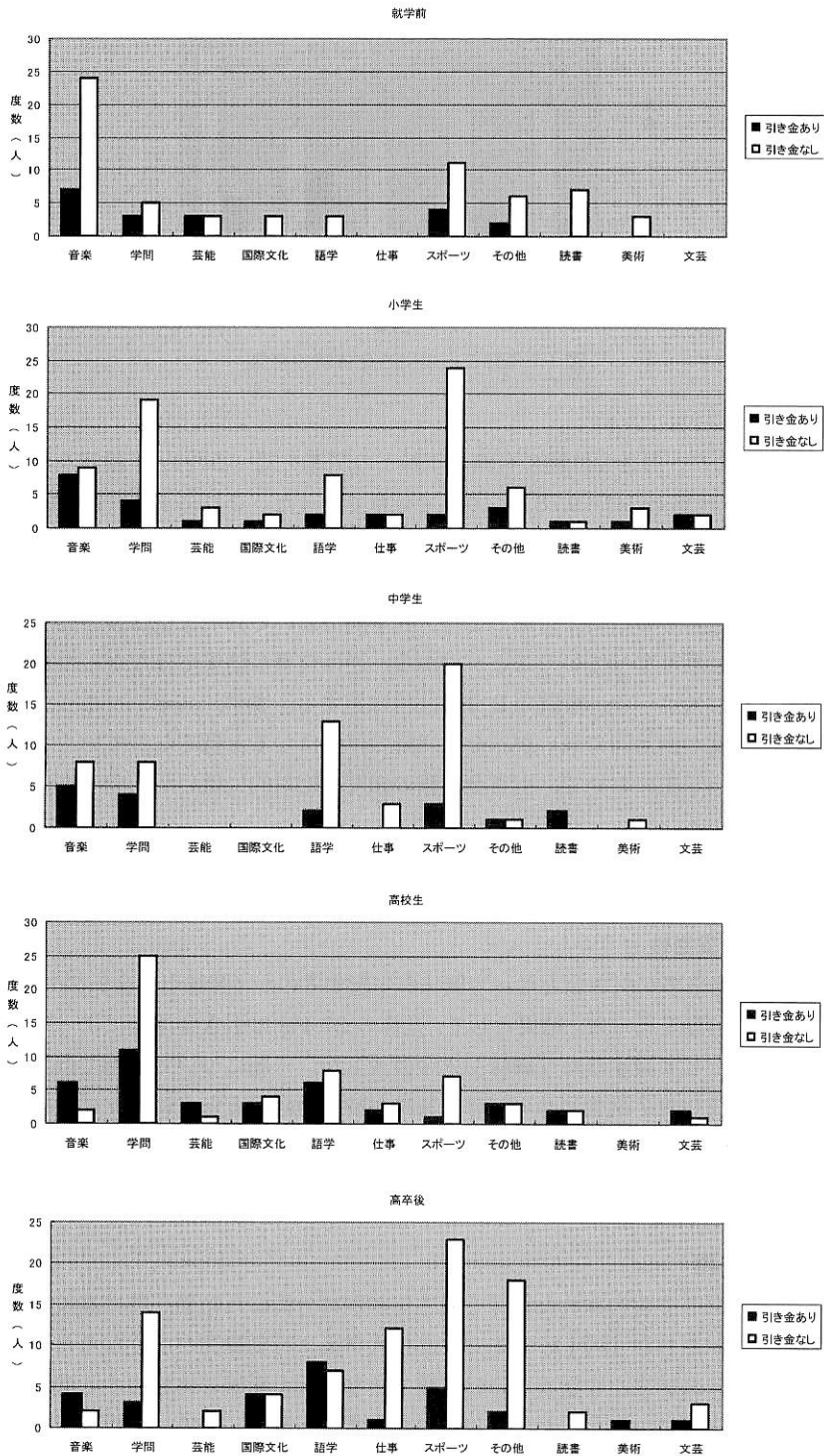


図 2 年齢ごとの初発興味と引き金体験

興味を持ったことは比較的最近の事柄であるため、まだ本当の興味かどうか分からないのではないかとと思われる。レポート形式で興味のきっかけを報告する場合、明らかに自分が興味を持ったと確信できる事柄を報告するため、高校時代に興味を持ったことを報告する傾向が高くなったと推察される。

興味の内容と年齢との関連で見えていくと、就学前と中学生の時期に特徴が現れた。就学前では、他の時期と比較して音楽における引き金体験の頻度が低い。興味を持った事柄として音楽を挙げる人数は多いのだが、それが引き金体験によるものではないのである。これは、就学前に音楽に興味を持つ場合、家庭内での継続的な音楽環境によるところが大きいため、「あの時、あの瞬間」というはっきりした出来事として記憶に残らなかったのであろう。一方、就学前であってもスポーツにおける引き金体験の頻度は高い。スポーツは音楽と異なり、家庭外へ出て行くことが多いと考えられるため、非日常的でユニークな体験が、引き金体験として機能したのではないだろうか。

また、中学生において、学問の引き金体験の頻度が高くなっているのは興味深い結果である。初等教育から中等教育へ移行することで、教科内容の変化、教科担任制の導入という新しい環境に身をおくことになる。そのような新しい環境で学習をする結果、教科内容そのものへの興味が引き金体験によって生じたのではないかと考えられる。このことは、教育現場に対して大きな示唆を与えるものである。「学力低下」や「理科離れ」など現在の教育現場には様々な問題があると指摘されている。しかし、本研究の結果から、中学入学後の教科担任制の中で、生徒の興味を引き金体験のような特定の出来事によって引き起こすことができる可能性が示されたのである。もちろん、生徒によってどのような出来事が引き金体験となるのかについては、本研究では明らかにできないが、中学からの学習において、引き金体験による初発興味の生起が多いという事実が示されたことは重要なことである。

4.3 初発興味の生起する心理的メカニズム

一般に、初発興味が生起する心理的メカニズムとして、もともと本人が持っている興味の種のようなものが、ある出来事を境に興味へと発展していく過程が想定される。本研究では、パーソナルドキュメントを分析する中で、このメカニズムには少なくとも2つのタイプが存在すると考え、初発興味が引き金体験によるものとそうでないものとに分類した。引き金体験による初発興味の生起を「引き金型」、継続的な体験によるものを「非引き金型」とし、その心理的メカニズムの違いを図示したものが図3である。引き金型では、引き金体験によって一気に興味へと結びついた様子を表している。一方、非引き金

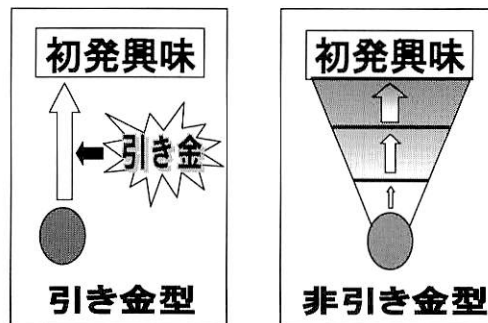


図3 初発興味の分類

型では、興味としての自覚がないまま継続的に体験を続けることで、いつからか興味につながった様子を表している。このように、初発興味の心理的メカニズムには大別すると2つのタイプが存在し、本研究の結果を踏まえると、この2分法がある程度妥当であると考えられる。

また、引き金型の個々の事例を検討すると、本人の傾向性の自覚があるか否かによって興味へと結びつく過程が異なっていた。傾向性とは、もともと好きだった、あるいは得意だったという本人の特性のことである。どちらの場合も引き金体験となる鮮烈な経験によって興味へと結びついたのだが、もともとある種類のことをすることが好きだったと自覚していた場合は傾向性の自覚ありとなるわけである。例えば、スポーツをすることがもともと好きだったなどというのは、傾向性の自覚ありとみなした。このことから、引き金型の場合、その心理的メカニズムには本人の傾向性の存在が影響を与えているといえる。さらに、本人がその傾向性をたとえ自覚していなかったとしても、引き金体験によって興味へとつながることも考えられるのである。

具体的な事例としては、以下の表2に示すとおりである。

表2 初発興味の典型例

| | 傾向性の自覚 | 事 例 |
|-------|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 引き金型 | 有 | 幼い頃からきれいな色が好きで、ある日母親と手芸屋へ行ったとき、何十色と並んでいた刺繍の糸の美しさにとっても感動して刺繍を始めた。〈就学前：その他〉 |
| | 無 | 高校生のとき、志望大学の学祭に行った。学内をふらついていると、どこからか歌声が聞こえてくるのでそれにつられて声のするほうへ行くと、たった5人でつむぎだされたそのハーモニーに心を動かされ、家に着く頃にはそのサークルで歌を歌うことを決意していた。〈高校生：音楽〉 |
| 非引き金型 | | 中学生のとき、仲の良かった友人がいたので剣道部に入った。しだいに、数々の昇段審査に受かりたい、先生に褒められたい、上達したいと思うようになり、また、上達する過程が楽しいと思うようになった。〈中学生：スポーツ〉 |
| 導火線型 | | 最初は何科目かある中学校の授業のひとつに過ぎず、「させられている」という意識のもとで英語を学習していたが、あるとき、普段自分が使っていた文房具に目をやると、そこに書かれていた短い英文が読めた。そのときの感動が、もっと英語が読めるようになりたい、もっと英語を勉強したいという気持ちを起こさせた。〈中学生：語学〉 |

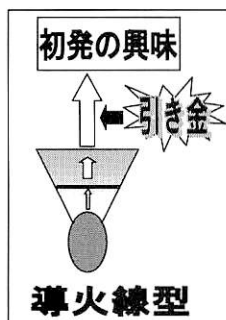


図4 導火線型

ところで、表2の一番下の例のように、初めての経験ではないが、ある出来事を契機に興味へと結びつくような事例が見られた。これは、非引き金型のように継続的な経験をしているが、その中で引き金になるような大きな出来事があり、引き金型のように一気に興味へと結びついた事例である。本研究では、これを引き金型として分類しているが、ある程度経験しているという点で異なるため、「導火線型」と名づけられるであろう(図4)。このように、人が興味を持つきっかけとなる出来事やそのメカニズムには様々な過程が考えられるが、本研究において収集したパーソナルドキュメントの結果から、それら広範な事例が4つの種類に分類できる可能性が示されたといえる。

4.4 今後の課題

本研究では、データ収集の方法上の問題を2点挙げるができる。1点目として、本研究で対象としたパーソナルドキュメントは回想的な記述に頼っているという点である。そのため、被験者の経験として新しいほど記憶として鮮明に残っている可能性が否定できない。年齢別の分析において、高校における引き金体験の頻度が高いのも、単に新しい記憶であるからとも考えられる。もう1点は、データそのものが被験者の文章表現力に大きく依存している点である。実際には、引き金型の興味であっても、「あの時、あの瞬間」という出来事の記述ができていないために、引き金型としてとらえられなかった可能性がある。特に就学前に興味づけられた場合、何がそのきっかけとなったのかを鮮明に記憶できていなければ非引き金型のようにいつの間にかという表現になってしまうことも考えられる。以上2点の問題を解決するために、今後は、様々な年齢層からデータを収集し、その時点で興味づけられている事柄は何か、そしてそれはどの年齢段階において興味づけられたのかなどを検討していく必要がある。また、縦断的な研究を行うことで、人が興味づけられている過程をよりダイナミックにとらえていくことができれば、さらに詳細に検討することもできるはずである。

一方で、本研究で示された初発興味の分類それぞれが、人の興味の継続性にどのような影響を及ぼすのか、さらに傾向性の有無や年齢など、引き金体験として機能する諸条件とはどのようなものかを理論化していく必要がある。逆に、非引き金型は単に引き金型ではないという扱いをしたが、実際に非引き金型とはどのような経路をたどって興味に結びつくのかを詳細に検討することも必要である。人の興味は様々であり、多様な特性、環境要因が影響を及ぼすと考えられるが、本研究における興味の分類や特徴は今後の研究に1つの指針を与える結果になるのではないかと期待される。

引用文献

- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1991 A motivational approach to self: Integration in personality. In R. Dienstbier (Ed.) *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation*, Vol. 38, Pp. 237-288. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Fink, B. 1991 Interest development as structural change in person-object relationships. In L. Oppenheimer & J. Valsiner (Eds.) *The origins of action: Interdisciplinary and international perspectives*. New York: Springer-Verlag.
- 速水敏彦 1998 自己形成の心理—自律的動機づけ 金子書房
- Hidi, S. 1990 Interest and its contribution as a mental resource for learning. *Review of Educational Research*, 60(4), 549-571.
- 鹿毛雅治 1995 内発的動機づけと学習意欲の発達 心理学評論, 38(2), 146-169.
- 鹿毛雅治 1998 学習と将来のつながり 落合良行(編著) 中学二年生の心理・自分との出会い 大日本図書

- 鹿毛雅治 1999 学習意欲の統合的構造を探る—教職志望動機の実分析—慶應義塾大学教職課程センター年報, 10, 59-77.
- 鹿毛雅治 2000 学習意欲の構造とその統合的発達(3) 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 539.
- Renninger, K. A. 1984 Object-child relations: Implications for both learning and teaching. *Children's Environments Quarterly*, 1, 3-6.
- Renninger, K. A., Ewen, L., & Lasher, A. K. 2002 Individual interest as context in expository text and mathematical word problems. *Learning and Instruction*, 12, 467-491.
- Renninger, K. A., Hidi, S., & Krapp, A. 1992 *The Role of Interest in Learning and Development*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.